MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１１．２８　発行元
第 532 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。今回もシリーズものだが、出版の間隔がやや広いものを選んでみた。「だいぶ間が開いたなぁ」と思うような作品。前の巻の内容の記憶が少し薄れて…。

書店の模様替えがあって…

私の住んでいる市の大型書店が模様替えをした。コミックの新刊が一番の店頭に位置するようになり、文芸書は一段奥の配置になった。置いてある本にはそれほど変化はなく、私には大した影響はないのだが、何か文芸書が目立たなくなってしまったような気がして少し残念である。世の中、コミックの方が売れ筋になっているのだと思う。

今年の秋の本の出版状況は比較的順調のように感じられる。文庫本も確実な歩みであり、単行本も読みたい本が並んでいる。買うのが追いつかないくらいだ。

今回は中堅作家のシリーズものを中心に取り上げてみた。手慣れた物語作りであり、安心して読み進めることができる。新人のギクシャクした文章ではないところが一番。特別に目を引く傑作とは言えないがまとまった作品に仕上がっている。

間もなく『このミステリーがすごい！』の時期がやってくる。どんな作品が今年の上位に食い込んでくるのかか楽しみである。

月原渉『すべてはエマのために』

７月に新潮文庫 nex から出た本。「使用人シズカ」シリーズの一作となるが、本作は第一次世界大戦時のルーマニア・トランシルヴァニア地方が舞台になる。シズカは本当にいろんな場所に姿を変えて現れるものだ。

リサ・カタリンという女性が主人公になる。看護師になったリサは、病気の妹・エマを救うために、ロイーダ家の雇われ人となりトランシルヴァニアの館に向かう。その時一緒になったのが医師の役目をするシズカ。館に着いて間もなく、館の主が密室の中で仮面を被った形で死体となって発見される。月原ミステリの中では物語性が強く、流れもよく考えられている。良い仕上がりの作品。

太田紫織『後宮の毒華　夏炎の幽妃』

８月に角川文庫から出た本。シリーズ２作目になる。中国。唐の時代。玄宗皇帝と楊貴妃のいる後宮を舞台にした物語。行方不明になった姉の身代わりとして後宮で暮らす高玉蘭少年。後宮での周りの様子がわかるようになり、少しずつ落ち着いた行動を取ることかでき始めた。探偵役の毒妃・ドゥドゥとの交流も軌道に乗ることに。

安定した文章で読みやすく、李白や安禄山なども登場して、歴史的な位置づけもしっかりなされている。後宮で起きる出来事をいくつか取り上げているが、最初の事件は楊貴妃発案の宴の場で、集まった妃嬪たちがバタバタと倒れるというもの。どんやら、急激な酔いのようにも受け取れるのだが…。ここに毒は存在するのか？

澤村御影『准教授・高槻彰良の推察EX2』

９月に角川文庫から出た本。シリーズ１１冊目になるが「ＥＸ２」の通り「番外編」の二冊目ということになる。高槻准教授と深町尚哉君の視点ではなく、取り巻く人達達から見たいろんなエピソードを連ねた形になっている。

最初の『やがてソレはやってくる』に出てくるのは、尚哉の友達・難波の彼女である愛美からの相談。愛美がマスコット人形をなくしたことをＳＮＳに載せたなら、いろんなコメントに混じって「はやく、みつけて」「さびしいよ」「むかえにきて」などの不気味な書き込みがなされるようになった。人形はだんだん近づいてくるようなのだが…。裏に隠れているものは…。

森晶麿『黒猫と語らう四人のイリュージョニスト』

紹介するのが遅くなってしまった。３月に早川書房から出た本。『黒猫シリーズ』の第九作になる。森晶麿作品でいうと、この『黒猫シリーズ』だけが特別高いレベルの仕上がりにあると感じる。ポオの作品を出発点にしているところに上手さを感じ、「黒猫」と登場人物たちとの会話も納得する感覚になれるのだ。

今回は「黒猫」が大学に長期休暇の届け出を出し、行方不明になってしまうところから話が始まる。休暇中にであったかもしれない四人の人物を一人ずつ四章に分けて登場させ、「黒猫」が何かに取り組んでいるらしいことを浮かび上がらせるのだ。第一話の『誰も知らない流行歌』の背景になっているポオ作品は『メッツェンガーシュタイン』。作詞家が亡くなり、葬儀に訪れるかつての歌手。大ヒットした曲の裏に存在するもうひとつの歌の秘密を語る。第二話『少年の速さ』の背景になっているポオ作品は『跳び蛙』。ここでも過去の話題作だった映画の監督、俳優の因縁が語られる。……。そして…。